

山陽教区第七組
第6回「被災者支援の集い」公開講座
福島第一原発事故8年

原子力緊急事態宣言が今も解除されず、事故の収束ができない福島第一原発事故。この大事故はなぜ起きたのか。東京電力刑事裁判の中で、その責任がどこにあるのかが、多くの人の証言で浮き彫りになりました。

その追及の中心となった福島原発告訴団団長武藤類子さんのお話を聞き、真宗ブックレット「いのちを奪う原発」等の編集委員である京都教区法伝寺住職長田浩昭さんと対談していただきます。多くの人と重大な問題を共有し、私たちが立つべきところを明らかにできればと願います。

第七組教化委員会
問合せ TEL090-3611-0162 (後藤)

2019年3月1日(金)

13時～16時半

真宗大谷派山陽教区
同朋会館 講堂

(姫路船場別院本徳寺境内)

姫路市地内町1番地 / P有

TEL:079-292-3690

参加費 500円

プログラム

13時～ 正信偈同朋奉讃、開会挨拶

13時20分～ 武藤類子さんお話

14時45分～ 質問後対談 長田浩昭さん

16時25分～ 閉会挨拶 恩徳讃

16時30分 終了

チラシ背景 福島第一原発3号機爆発写真

「福島の実況と結審を 迎える東電刑事裁判」

武藤類子さん

(福島県三春町在住)

そして、何の対策も取られないままに東日本大震災が起こり、あれだけの事故が起こってしまった。その責任は、やはり大きいのではないかと思うのです。

そして、こんなふうに「責任が問われない」という場面が、日本の歴史の中にはたくさんあったと思うんですね。戦争責任の問題もそうだし、これまで多々起こってきた公害の問題もそう。一番責任があるはずの人たちの責任は問われないまま、いくつも放置されてきたと思います。そして国も大企業も、被害者を、弱い立場にある人たちのことを大事にしてこなかった。

実は、東日本大震災と原発事故が起こったとき、これで少しは日本という国も変わるんじゃないか、という思いがあったんです。これだけの大事故が起こったんだから、いくらなんでも国も企業も変わるだろう、ちゃんと被害者を守るために動くだろう、と。でも、1年経ってみて、実際には何も変わらなかったことが分かって、とてもがっかりしました。

さらにこのまま、今回の事故の責任も問われないとしたら、この先もこの国は変わらない。十分な救済もされないまま、国民は黙らされていこう。そう思いました。それで、一緒に反原発の活動に取り組んできた仲間たちとともに、告訴に踏み切ることを決めたのです。

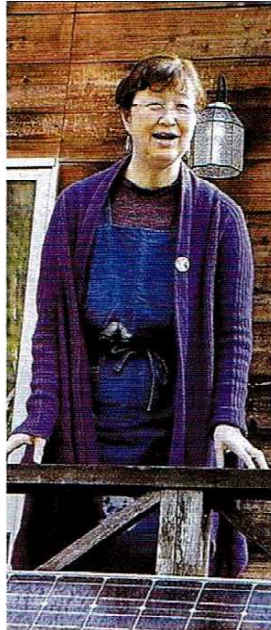
2013.マガジン9武藤類子さんインタビュー「なぜ福島原発告訴団は立ち上がったのか」より抜粋

「福島原発事故はなぜ起きたのか」

プロフィール

武藤 類子(むとう るいこ)

1953年福島県生まれ。福島県三春町在住。和光大学卒業後、版下職人、養護学校教員を経て、2003年に里山喫茶「燦(きらら)」を開店。チェルノブイリ原発事故を機に反原発運動にかかわる。福島第一原発事故発生以来、福島原発告訴団団長、原発事故被害者団体連絡会共同代表、3.11甲状腺がん子ども基金副代表理事を務める。著書に『福島からあなたへ』(大月書店)、『どんぐりの森から』(緑風出版)。2013年12月、「第9回 女性人権活動奨励賞(やより賞)」を受賞。



ひと

脱原発スピーチが世界に広がる

朝日新聞

武藤 類子 さん(58)

原発事故の前は小さな喫茶店だった福島県田村市の山里の自宅に昨秋、シカゴ大のノーマ・フィード教授が突然訪ねてきた。東京で9月にあった脱原発集会でのスピーチに感動した、米国でも話して、と。姉妹の再会のように2人は意気投合、シカゴ大での講演は今年5月5日に実現した。「いま隣にいる人とそっと手をつないでみて下さい。互いのつらさを聞きあいましょう」。集会のスピーチ「福島から あなたへ」はインターネットで何万回と再生され、各国で出版の話が進む。普段は山小屋で本を読むのが好きな物静かな女性は、6万人の聴衆を前に足がすくんだ。だが演壇に立つと「怒りを秘めた東北の鬼」に変わった。写真 本田雅和

「原発事故の前は小さな喫茶店だった福島県田村市の山里の自宅に昨秋、シカゴ大のノーマ・フィード教授が突然訪ねてきた。東京で9月にあった脱原発集会でのスピーチに感動した、米国でも話して、と。姉妹の再会のように2人は意気投合、シカゴ大での講演は今年5月5日に実現した。「いま隣にいる人とそっと手をつないでみて下さい。互いのつらさを聞きあいましょう」。集会のスピーチ「福島から あなたへ」はインターネットで何万回と再生され、各国で出版の話が進む。普段は山小屋で本を読むのが好きな物静かな女性は、6万人の聴衆を前に足がすくんだ。だが演壇に立つと「怒りを秘めた東北の鬼」に変わった。写真 本田雅和



プロフィール

長田浩昭(おさだひろあき)

石川県珠洲市長選挙において反

原発の候補の応援活動を機に、宗教者として原発行政と向き合い続けている。原発を課題とする宗教者の全国ネットワーク「原子力行政を問い直す宗教者の会」事務局長。真宗大谷派京都教区法伝寺住職。真宗大谷派ブックレット「いのちを奪う原発」「原発震災と私たち」著・編集委員。

真宗ブックレット

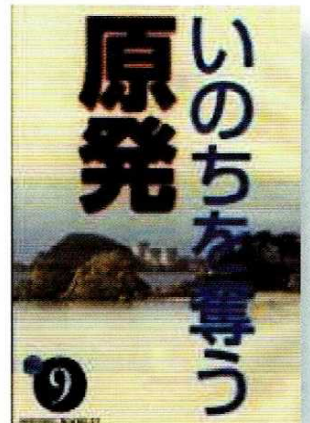
発行 真宗大谷派宗務所 出版部(東本願寺出版)

No.9

「いのちを奪う原発」

No.13

「原発震災と私たち」



「原子力行政を問い直す宗教者の会」

時代の潮流にただ漫然と乗ることではなく、流れに逆らわなければならない時に、流れに抗して生きること。宗教とは本来、そのことを可能にするものではないだろうか。(HP伝道掲示板より)

私たちはそれぞれに宗教・信仰をもっている。その意味を今鋭く問われはじめています。私たちは1992年10月、原発や電力行政一般を司る通産省、資源エネルギー庁と核燃やプルトニウム行政を所管する科学技術庁と「対話」を行い、国の原子力行政を根本的に問い直す歩みの、第一歩をようやく踏みしめた。原子力行政を問うことは自身の宗教的信念を問い直すことでもある。

1993年6月6日 敦賀結成集会呼びかけ文より